

鉄道盛土の地震増幅特性評価のための等価1自由度モデルの適用性

(公財) 鉄道総合技術研究所 正会員 坂井 公俊, 荒木 豪
(株) 複合技術研究所 正会員 ○鈴木 聡

1. はじめに 盛土の地震応答を詳細に評価する方法として、2次元の有限要素法等が用いられる。しかしながらこれを路線全体で適用することは実務的に困難であり、何らかの簡易な手法によって評価する必要がある。そこで、水平成層地盤において提案されている地盤の静的非線形解析とそれに基づく等価1自由度モデル¹⁾による盛土本体の応答評価の可能性について検討を行う。

2. 等価1自由度モデルによる鉄道盛土の地震挙動評価

(1) 鉄道盛土の等価1自由度モデルの構築

盛土本体の等価1自由度モデルの構築イメージを図1に示す。モデル化の基本的な考え方は、水平成層地盤から等価1自由度モデルを構築する手法¹⁾と基本的には同一である。ただし、これまでの等価1自由度モデルでは、水平成層地盤を対象としていたために、単位面積当たりの重量を考慮した土柱モデルを用いた静的非線形解析によって評価を行っていたが、盛土では高さによって幅が異なるとともに、2次元的な挙動の影響も考えられる。そこで、本検討ではこのうち高さによる重量変化の影響のみを図1に示すように考慮することとし、各位置毎に重量を調整した1次元の多層モデルを用いた静的非線形解析を実施することとした。また、盛土の地震時挙動を評価する場合には、支持地盤との相互作用の影響も無視できないと考えられ、この効果を適切に考慮する必要がある。そのため静的非線形解析を実施する際に、盛土本体の1次モード有効質量比も結果として算出することとする。

対象盛土は、高さ9m、勾配1:1.5、天端幅10m、せん断弾性波速度200m/s、重量 $\gamma=20\text{kN/m}^3$ の均質な材料で構成されているものとし、支持層は $V_s=400\text{m/s}$ 、 $\gamma=20\text{kN/m}^3$ とした。各層の非線形構成則は、GHE-Sモデル²⁾とし、盛土中心位置の拘束圧を用いた規準ひずみ³⁾と各非線形パラメータ¹⁾を設定した。静的非線形解析は、1ステップでの増分変位 $\Delta\delta$ を0.01cmとし、最終ステップの変位が50cmとなるように漸増载荷させた(計5000ステップ)。

以上の条件に従って、静的非線形解析を実施した結果をまとめて図2に青線で示す。なおこれらの図は、横軸を規準変位 δ^1 (剛性低下率 G/G_0 が初期剛性の0.5倍となる地表面変位)で除して規準化している。これらの結果を見ると、通常水平成層地盤と同様に、天端変位の増加に伴う全体系の剛性低下、減衰の上昇が見られる。また、変位の増大に伴って、刺激関数 PFF は減少し、有効質量比 EMR は多少増加していることが分かる。

続いて、この結果を再現できるような等価1自由度モデルのパラメータを設定した。この時の非線形構成則はGHE-Sモデルで与え、その他のパラメータは、図2の解析結果を最も再現できるものを目視によって決定した。最終的なパラメータを表1に、このパラメータを用いて再現される $G/G_0-\delta$ 関係、 $h-\delta$ 関係を図2(a), (b)にそれぞれ点線で示す。これを見ると、盛土全体系の静的非線形解析結果を概ね適切に再現できており、このパラメータを用いることで、盛土全体の非線形挙動の再現が期待できる。

(2) 非線形動的解析による妥当性の確認

構築した等価1自由度モデルによる応答評価の妥当性を評価するため、2次元のFEMによる応答解析の結果を正解値と位置付けて、これ等価1自由度モデルによる結果との比較を行う。2DFEMモデルに付与するパラメータは、上記(1)の1DMDOFモデルと基本的には同一である。ただし、ひずみ方向の複雑さに対応できるように、マルチスプリング要素⁴⁾によって非線形挙動を考慮することとしている。底面の境界条件は固定とした。動的解析時の減衰は、0.2Hzと10Hzで3%となるようなレイリー減衰を設定した($\alpha=9.362\text{E-4}$, $\beta=7.392\text{E-2}$)。入力地震動は、

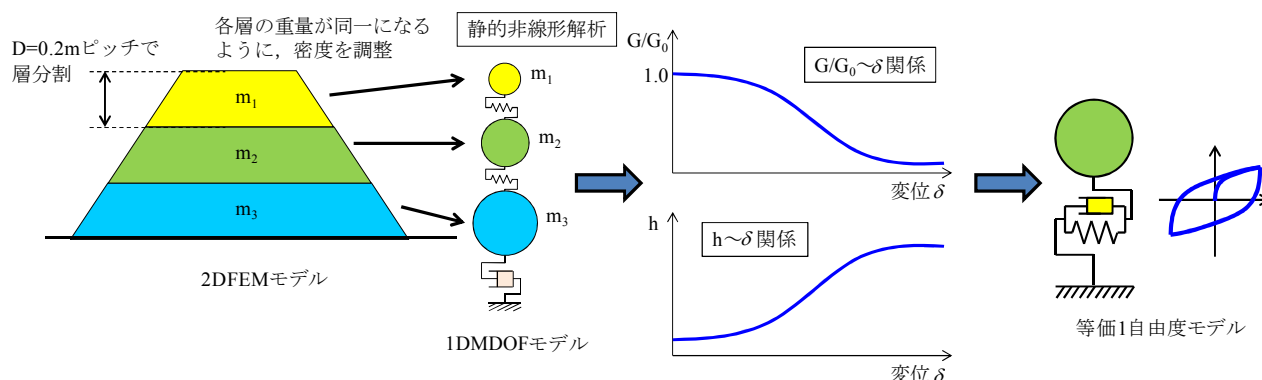


図1 盛土の等価1自由度モデルの作成手順の概要

キーワード 盛土 地震応答解析 等価1自由度モデル

連絡先 〒160-0004 東京都新宿区四谷 1-23-6(協立四谷ビル 5F) (株)複合技術研究所 TEL 03-5368-4101

鉄道構造物の耐震設計に用いられている L2 地震動スペクトル II (G1 地盤) を用いた。また計算は、地盤を線形とした場合と非線形にした場合の 2 パターンの検討を実施した。さらに等価 1 自由度モデルによって得られた応答波形を盛土天端位置に換算する際には、簡易的に 1 自由度モデルによって得られる最大変位の時点での刺激関数 PF を全時刻に用いることとした。

以上の条件に従って動的解析を実施した結果得られた盛土天端位置の応答波形と、天端応答の弾性応答スペクトルを図 3 にまとめて示す。まず線形解析の場合は、等価 1 自由度モデルによって盛土天端位置の応答をほぼ完全に再現できている。また非線形解析の場合においては、刺激関数を振幅の大きさに依存せず一定の値としているものの、2DFEM による応答を概ね再現できており、天端応答の応答スペクトルも調和的な結果を得ている。

3. まとめ 本検討では、鉄道盛土の地震時挙動を簡易に算定するための等価 1 自由度モデルを提案するとともに、詳細法による応答解析結果との比較を行った。本手法を用いることで、簡易かつ適切に盛土天端の応答を算定できることを確認した。本検討の一部は、国土交通省の鉄道技術開発費補助金を受けて実施した。

参考文献 1) 坂井, 室野: 土木学会論文集 A1 (構造・地震工学), Vol.71, No.3, pp.341-351, 2015. 2) 室野, 野上: 第 12 回日本地震工学シンポジウム論文集, pp.494-497, 2006. 3) 安田, 山口: 第 20 回土質工学研究発表会, pp.539-542, 1985. 4) Towhata and Ishihara: *Proc. 5th International Conference for Numerical Method in Geomechanics*, Vol.1, pp.523-530, 1985.

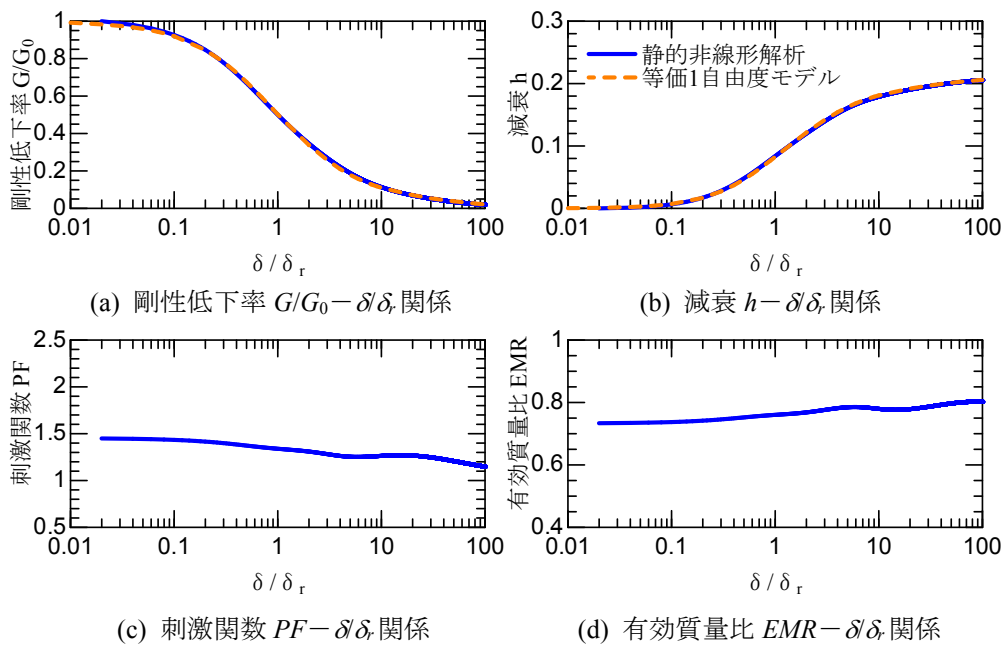


図 2 盛土の静的非線形解析結果, パラメータ設定結果

表 1 設定した等価 1 自由度モデルのパラメータ

$C_1(0)$	$C_2(0)$	$C_1(\infty)$	$C_2(\infty)$	$C_1(1)$	$C_2(1)$	κ	h_{max}
1.00	1.00	0.15	2.5	0.87	1.15	1.30	0.21

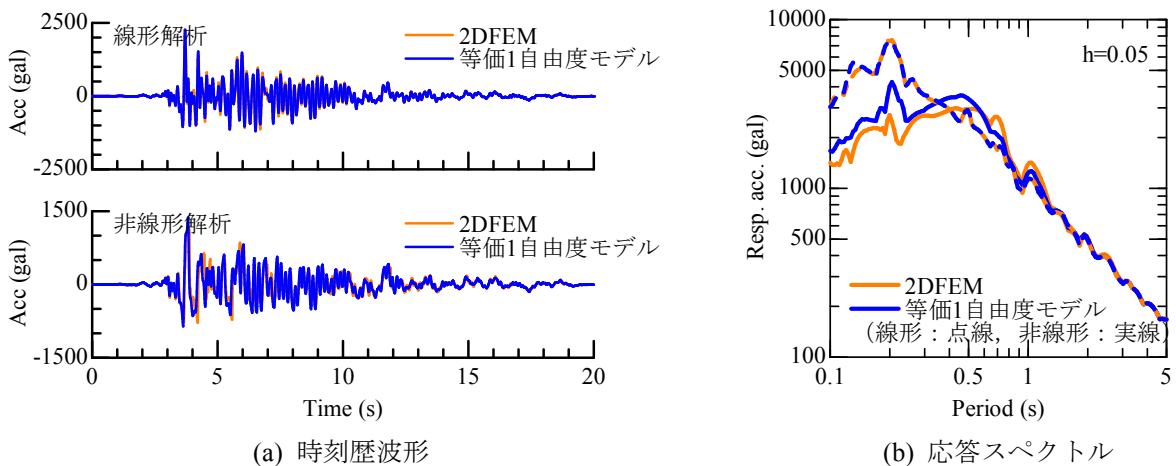


図 3 盛土天端位置の応答波形算定結果